

山形、予備選考の思い

稲田隆紀 (映画評論家)

「ドキュメンタリーの固定観念から解き放たれて、その幅広さを知る格好の機会ですよ」

1988年、当時の山形国際ドキュメンタリー映画祭東京事務局、矢野和之氏のことばに惹きこまれて、インターナショナル・コンペティション部門の予備選考に参加を決意し、いつのまにか四半世紀が経ってしまった。

その意義、喜びは回を重ねるごとに感じ入るもので、もはや私にとってはライフワークに等しい。矢野氏には感謝するばかりである。

2年に1回、膨大な数の作品に接するのは肉体的に極めてハードではあるが、充実感と精神的な喜びに溢れている。私はこうした作品群に触れることで、文字通り世界を知った。

ふりかえれば、第1回山形国際ドキュメンタリー映画祭が開かれた1989年から現在まで、世界は激動の一途をたどった。東西の壁が崩れ、湾岸戦争、

旧ユーゴスラヴィア内戦、アメリカ同時多発テロ、アフガニスタン侵攻、イラク戦争があった。台湾、中国、そして東日本で起きた天変地異があった。世界は混乱し、めまぐるしい速度で変貌を続けている。

そうした世界に対して、作家たちはそれぞれの視点を明確にしつつ、対象を咀嚼して作品に昇華させる。ひとつの出来事も立脚点によってどのように描くことも可能だということを教えてくれた。応募作品はおしなべて中立公正とは対極で、世界を切りとる作家それぞれの“真実”が焼きつけられている。ここに私は魅せられた。私は予備選考を通して、ロバート・クレイマーやエロール・モリス、フレデリック・ワイズマンをはじめとする、素晴らしい匠たちの作品に触れることができた。ドキュメンタリー映画のみならず、世界に対する目が拓いたといってもいいだろう。

では、予備選考はいかに行なわれるか――。

他の映画祭と同じく、10名前後の予備選考員の合議制で作品が選ばれていく。近年は毎回1,000本前後の応募があり、限られた半年の期間ですべての作品を吟味することになるから、ひとりで全作品をみるのは不可能。それぞれのメンバーが分担して推薦作を提出し、合議することになる。メンバー構成は不変ではないが個性に富んだ人選がなされている。それだけに議論百出、選考会はスリリングなものになるのだが、過去の選考会で即座に全員一致で選ばれた作品が、唯一ある。

『鉄西区』である。9時間という上映時間を走破したときの感動と達成感にすべての選考員が酔いしれた次第。作品をみただけならば、その気持ちを納得いただけるだろう。

現時点で2013年の予備選考は終了しているが、私は推薦されなかった応募作品を、時間をかけて吟味したいと考えている。残りの人生をかけて多様なドキュメンタリーを見続けること。これが今後の目標である。